

金沢学院大学大学院

2025 (令和 7) 年度 入学者選抜試験問題 (Ⅱ期)

2025 年 2 月 22 日 (土) 実施

人文学研究科心理学専攻  
修士課程

# 小論文

注意事項

1. 問題冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはいけません。
2. 解答は、解答用紙（提出用）に書きなさい。
3. 問題冊子・解答用紙（提出用）・下書き用紙に受験番号・氏名を記入しなさい。
4. 試験終了後、問題冊子・解答用紙（提出用）・下書き用紙を回収します。

受験番号	
氏名	

次の問1～4について、すべてに解答しなさい。

**問1**

急性ストレス障害（ASD）について説明し、その上で、PTSDとの違いについて説明しなさい（全体で250字程度）。

**問2**

「合理的配慮」について、後の問い①、②に答えなさい。

- ①合理的配慮の提供の義務について記載された法律名を示しながら、合理的配慮について説明しなさい（150字程度）。
- ②教育現場で想定される合理的配慮の具体例を一つ書きなさい。なお、その際にはどのような障害を想定しているのかについても触れること。

**問3**

「学習性無力感」について説明しなさい（200字程度）。

#### 問4

大学院で臨床心理学を研究している A さんは、自身が考案した介入プログラムが抑うつ症状を軽減することを実証するため、以下のような研究計画を立案・実施した。

- ア) 抑うつ診断を受けて治療中である人たちを研究協力者として集め、標準化された抑うつ検査の尺度を用いて介入プログラム実施前の抑うつ度を測定する
- イ) 研究協力者全員に、介入プログラムを実施する
- ウ) 介入プログラム終了後に、同じ抑うつ検査の尺度を用いて研究協力者の抑うつ度を測定する

この手続きを通して得られたデータにおいて、介入プログラム実施前の抑うつ度の平均は 17.8 点、実施後の抑うつ度の平均は 17.3 点であった。以上の情報を踏まえた上で、後の問い①～③に答えなさい。

- ①得られたデータに基づいて介入プログラムの効果について検討するため、Aさんは「介入プログラム実施前の抑うつ度の得点」と「介入プログラム実施後の抑うつ度の得点」を用いて、対応のある  $t$  検定を行うことにした。この検定の帰無仮説はどのようなものになるかを述べなさい。
- ②Aさんが上記の検定を行ったところ、 $p$  値が 0.024 であるという結果が得られた。有意水準 5% で判断を行うとき、この結果から介入プログラムが抑うつ症状に対して与える効果について導かれる統計学的な解釈を述べなさい。
- ③この研究で使用した抑うつ度を測定する尺度の得点は、16～19 点の範囲であれば軽度から中程度の抑うつ状態であり、専門家の治療が必要であるという判定基準が定められている。これを踏まえた上で、Aさんの考案した介入プログラムが持つ臨床的な実用性について論じなさい。

年度	2024年度実施
研究科	人文学研究科
課程	修士課程
専攻・コース等	心理学専攻
試験科目	Ⅱ期小論文
実施日(試験日)	2025年2月22日

解答又は解答例及び出題意図

○出題意図

人文学研究科心理学専攻修士課程のアドミッションポリシーのうち、「1. 心理学及びその関連領域に関する専門的知識と真摯な探究心」に関して、入学者が資質を有していることを確認することを目的としている。加えて、公認心理師養成において必要な、臨床心理学に限らず、幅広い分野について理解していることが求められるため、心理学における用語や理論、心理統計に関して説明、論述する形式としている。

○解答または解答例

問1 急性ストレス障害(ASD)は自身の生命を脅かすほどの強烈な危機を経験したり目撃したりすることで、様々な身体的・精神的な症状が現れることである。症状はフラッシュバックに代表される侵入症状、危機的体験に関連する情報を避けようとする回避症状、興味関心の低下などの認知・気分の否定的変化、不眠・緊張・集中困難などの過覚醒、解離症状の5つが代表的である。急性ストレス障害(ASD)はトラウマになる出来事を経験して間もなく始まり、1カ月未満で消失するが、PTSDの場合、症状が1カ月以上持続する場合に診断され、症状の持続期間に違いがある。

問2-①

障害者差別解消法に示された障害のある人の人権が障害のない人と同じように保障されるとともに、教育や就業、その他社会生活において平等に参加できるよう、それぞれの障害特性や困りごとに合わせておこなわれる配慮のこと。

問2-②

- ・肢体不自由な学生のため、その学生が受講する授業はすべて1階で行う
- ・学習障害のため読むのに時間がかかる学生に対するテストにおける時間の延長
- ・自閉症スペクトラム障害による感覚過敏のある学生に対する別室受験の許可 など

問3 学習性無力感とは、統制不可能(回避不可能でもよい)な嫌悪事態や失敗を繰り返し経験することによって動機づけが低下する現象で、自己の反応に対する自己効力感の低下によって生じる。セリグマン&メイヤーの実験では、能動的回避事態で回避不可能な電撃を経験した犬は、その後の受動的回避事態で反応が遅く、失敗も多かった。セリグマンは、犬が「自分の行動が無力であることを学習した」ように見えるとして、学習性無力感と呼んだ。過去にはうつ病のモデルと考えられていたこともある。

問4-① 「介入プログラム実施前の抑うつ度の得点」の平均と「介入プログラム実施後の抑うつ度の得点」が等しい

問4-② 検定結果は5%水準で有意であると判断される。また抑うつ度の平均は介入プログラム実施後の方が低くなっていることから、このプログラムは抑うつ度を低下させる統計的に有意な効果を持っていると考えられる。

問4-③ (解答例)対応のあるt検定の結果から、この介入プログラムが抑うつ度を低下させる統計的に有意な効果を持っていることは確かである。しかし実際の抑うつ度の低下量は臨床的な判断が変わるほど大きなものではないため、実用性は低いと考えられる。(採点方針:介入プログラムは①統計的に有意な効果を持っている、②臨床的な効果は大きいとは言い難いという2点を抑えた議論ができていればOK。結論そのものは、回答例1と2のどちら寄りであっても構わない。)